

# 月刊 書字文化

～日本書字文化協会機関紙 No60～

平成 30 年

10月号

編集長 渡邊啓子

一般社団法人日本書字文化協会

代表理事・会長 大平恵理

〒164-0001 中野区中野 2-11-6 丸由ビル 301

電話 03 - 6304 - 8212 FAX03 - 6304 - 8213

Eメール info@syobunkyo.org

////////////////////////////////////

## 目次 (全 10 ページ)

中央審査会を開く 9/24・中野 総合大会を一括審査	2
コラム・こころ 大平恵理	5
新ライセンス開始へ 5月、11月に実施	6
新硬筆検定サンプル版できる 希望者に配布へ	7
東・西・南・北 Dr. ジョレンビー	8
日中友好 書法と書道の交流を促進	9
第4回臨書展来年3月開催へ	10

ウェブ版資料編 (バックナンバーからご覧ください)

◇資料編①パンフレット「書字教育の書文協」・・・7・8月合併号に掲載済

◇資料編②パンフレット「硬筆課題検定指導添削コース」・・・同

◇新硬筆検定実施要項、新硬筆検定特別段級判定試験規則・・・5月号済

**\*月刊書字文化の当月号の印刷は「月刊書字文化」のバナーから入るとPDF化したものがありますので、これをお使いください。新着情報からリンクしたものは、ネットでのヒット確保のための製作上ページの境目などが分かり難くなっています。**

# 総合大会席書の部 27%増

## 中央審査会を開催 9/24 東京・中野

第7回全国書写書道総合大会の中央審査会は9月24日、東京・中野の区立産業振興センターで開催されました。応募数は「ひらがな・かきかたコンクール」7018点（第6回8500点）、「全国学生書写書道展(席書・公募)」1768点（同1690点）、「全国硬筆コンクール」4089点（同4359点）。総応募点数は13、875点(第6回14、549点)でやや減となりました。各種災害の影響も大きいと見られますが、席書の部参加作品の大幅増が目立ちます。

学生展席書の部(毛筆)は各地で決勝大会を分散開催しており、全作品が書文協本部に集められ審査されます。応募数は1188点（前回933点）で約1.27倍増でした。席書大会参加料を大幅に値下げするなど、多くの人に参加できる環境づくりに力を入れました。それがある程度奏功したと見ています（9ページに関連記事）。審査結果を元に精査を続け11月初旬、賞状・副賞の送付をもって発表とします。

加藤東陽中央審査委員長はあいさつで「（書文協の理念である）一流一派に偏しない審査を広げてゆきたい」と述べました。

大会議室で最後の  
詰めの審査風景。  
毛筆作品はボード  
に、硬筆作品は審  
査員の前に



当日出席審査員

<書文協中央審査委員>

加藤東陽（中央審査委員長、全書研会長）、辻眞智子（中央審査副委員長）、柴田五郎（元東京都小学校書写研究会部長）、豊口和士（文部科学省教科調査官、文教大学教授）、長野秀章（全書研理事長）、西村佐二（元全国連合小学校長会会長）、宮澤正明（山梨大学教授）

<書文協専門審査員>

大平恵理（書文協会長）、渡邊啓子（同副会長）、池田圭子（同教学参与）、桑島智子（秀雪書道教室主宰）

# 「ひら・かきコン」特別賞も一括審査

中央審査会は全応募作品の中から約1.5%の特別賞を決める審査会です。前回までは「ひらがな・かきかたコンクール」は別途審査していましたが、今回は特別賞は一括審査しました。参加者全員に授与される本賞（特選、金・銀・銅賞）は既に発表済みです。幼児から高学年への連続性をより意識してもらうため、10月28日の優秀作品展示・交流会でも、これまでよりはるかに多い幼児の作品が展示されます。

「ひらがな・かきかたコンクール」は、文字を手書きし始めた幼児の自信につながり、自己肯定感が強まることを最大の目的としています。その上で、文字への興味・関心を高め、手書き練習の道に進むことを期待します。

## 会員10人が傍聴

酷暑、豪雨、地震、台風直撃など、この夏は災害が相次ぎ、被災された教室も少なくないことから、中央審査会開催時に恒例の会員総会は日を改めることにしました。それでも徳島県から1団体2名、大阪府から2団体2名など6団体10人の会員が傍聴に来られました。中央審査会は透明性確保のため希望会員にはオブザーバー参加が認められています。

審査会終了後は近くで懇親会が開かれ、参加者から近況が報告され盛り上がりました。会員総会は改めて連絡します。

# 優秀作品展示・交流会10/28中野ゼロホール

## ひら・かきコン優秀作品も多数展示

恒例の「優秀作品展示・交流会」は10月28日午前10時から午後3時30分まで、中野ゼロホール西館で開かれます。各コンクール大臣賞、総合の部（大臣賞および書字文化賞）の計約15人は、参加される人には交流会での授与を予定しています。改めて連絡します。

交流集会は午後1時から開催、2時ごろから集団記念撮影も予定されています。この展示・交流会は応募者と指導者・家族ら関係者なら誰でも参加できますので、奮ってご参加ください。

### 中野ゼロホールアクセス

JR、地下鉄東西線「中野駅」南口下車。駅を背にして左へ、線路沿いを新宿方向へ徒歩8分の右側。西館は本館の手前を右に入る。なかのZERO（もみじ山文化センター）〒164-0001 東京都中野区中野2丁目9-7 電話 03-5340-5000(代)

## 新委員・豊口先生プロフィール

豊口 和士（とよぐち・かずお） 1967生れ。東京学芸大学卒。文教大学文学部日本語日本文学科教授。書道および書写書道教育を専門分野とする。全書研部長。2018年度から、学校教育をリードする文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官に就任。従来の形式にとらわれない自由な書風で注目される。著書に「豊口和士作品集」（文教大学出版事業部）。



## 中央審査会



審査会全体会議風景 ↑



左から長野、桑島委員 ↑

左から豊口、宮澤委員 ↓

左から西村、柴田委員 ↓



左から大平、辻、加藤、長野委員 ↓



## 長野委員が発刊「コトバノカケラ」

ペンネーム「南全星」を持つ長野竹軒（秀章）先生が新刊「コトバノカケラ」（言葉・南全星書・長野竹軒 発行・カオスデザイン研究所、税込み2000円）を出しました。

「書は自分の“コトバノカケラ”を書く芸術でありたい」と冒頭にあります。南全星（サザン・オールスターズ）が言葉を紡ぎ、それを竹軒先生が書いた異色の書作品集です。2015年、銀座で開かれた東京学芸大学教授退官記念の個展での大作「かつ井礼讃」で、南全星はすっかり有名になりました。この本は、今年8月23日付け毎日新聞夕刊「書の世界」にく「漢字仮名交じり」への誘いへの見出しで取り上げられました。元文部科学省初中局教育課程課教科調査官。同大学名誉教授。



# こころ

大平 恵理(書文協会会長)

## 楽しく型を破る



下の娘が通う私立高校の文化祭を見に行きました。娘は1年生で書道部に入っていますが、学校のことをあまり話してくれません。このところ、足の裏を墨で汚して帰ってくるので、しつこく聞いてみましたら 部活でそうになっているらしいのです。「ははん」と、ピンとききました。文化祭でパフォーマンス書道をやりますようです。学校の創立記念祝賀会で部活の顧問の先生にお聞きしたら、その通りだったので書道部の出し物を覗きに行った次第です。

書道部のパフォーマンス書道は、それは上手でした。大筆を持って、床に敷き詰めた紙の上に字を描いていくのです。自由で愉快的感じの書き物が出来上がりました。1年坊主の娘も頑張っています。上級生の邪魔にならなければ良いが、と心配しました。しかし、気難し屋の娘の表情に楽しげな気配が浮かんでいるのを見て「ああ良かった」と、胸をなでおろしました。

「型から入って型から出る」が書文協のモットーです。型から入るために書写を重視しますが、それで終わることを目指しているわけではありません。

あるとき、学習指導要領遵守の旗を振っておられた文科省の最高幹部に、退官後にもお会いしました。そのOBは在職中とは違う自由な口調で「学習指導要領は基礎基本を作るもので、それができたら後は自由でいいのですよ。独創的な人を“型破り”、逆に基礎ができていない人を“型なし”と言うでしょ」。

学校では中学校までは国語教科の一領域として「書写」、高校から芸術教科の「書道」に名前が変わります。真っすぐにはつながらないメビウスの帯にも例えられる書写と書道。しかし、書文協中央審査委員長の加藤東陽先生(日本武道館審査リーダー)はこう言われます。「書写と書道は同根にして同心円です」。納得です。つまりは紙と墨の世界ですから。

型から「出る」のが「入る」より難しい現実。「書写に固執し過ぎる」と批判もされがちです。

書写で育ってきた娘が初めて出会ったパフォーマンス書道。二人の先達の言葉に加えて、私が強く感じたのは“皆でやる楽しい書道”という側面でした。書文協のモットーは「賞取り合戦はやらない。仲間と切磋琢磨」です。それに「楽しくやろう」も加えたいと思います。



(2018・9・29, 30 東京・九段で)



# 新指導者ライセンス試験を実施へ

## 2019年5月・11月実施

書文協の事業の中心は、全国書字文化検定試験と指導者ライセンス(資格)試験の実施及び段級・資格の付与、そのための授業・講習会です。全ての人の福祉の向上を目指す団体(法律上は公益団体等)として、社会的に信用される段級・資格を目標としています。

書文協は、2020年2月に創設10周年を迎えますが、この目標に向かい、検定・ライセンス制度の改善を進めています。そのポイントは、以下のようなものです。

### ＜検定・ライセンス共通改善事項＞

#### ① 試験は「硬筆、毛筆、カルチャー」の3種に

いくつもの種類に分かれている現行の検定、ライセンス試験を硬筆、毛筆に大別。これに百人一首や筆ペン書きなどカルチャー部門を加えて、3種類とする。

#### ② 受験の自己申告制

検定・ライセンス試験の受験結果は書文協に記録・保存されるが、受験(無試験による段級申請含む)は自己申告制とする。常に自分の学びの進度に関心を払い、向上意識を持って試験に臨む態度を養うこととする。所属教室を通じた個人の求めに応じて個人成績はいつでも開示されるほか、試験実施などの案内は各教室宛て文書で、また書文協ホームページで告知する。

#### ③ 現行成績の永久保存と移行措置

現在、取得されている段級・ライセンス記録は書文協データベースに適切に永久保存され、本人の求め、及びそれに基づく教場の求めに応じてのみ開示されます。現行の付与されている段級・ライセンスがなくなるわけではありません。新制度への移行については特別段級認定試験(月刊書字文化資料編に同規則)をご利用ください。

### ＜ライセンス試験＞

#### ① 検定成績と切り離し実施

これまでは検定試験の累積点が一定の点数に達するごとにライセンス試験の受験(無試験での段級申請含む)ができる仕組みでしたが、新制度では、受験者が受験レベルを自由に指定できます。

#### ② 指導者に必要な資質を求める点も加味

新制度では、作文などで受験者の書写書道及び指導者観を問う出題も含めます。

#### ③ 試験は「硬筆・毛筆・カルチャー」、資格は初級・中級・上級・師範の4段階とする

ライセンス試験はこれまで何種にも分かれていましたが、検定試験と同一の3種類とします。資格も10段階にも分かれていましたが、これを初・中・上・師の4段階とし、皆に分かり易く、より実用的なライセンスとします。

#### ④ 実施時期は年2回

ライセンス試験は年2回、5月と11月、その手続き期間は前々月の3月、9月とします。

# 検定制度改革 新硬筆テキストサンプル版完成

指導者ライセンス（6ページに関連記事）に次いで、検定試験改革について説明します。

検定試験は現在、学校教育部門と生涯学習部門について計13コースもあります。受け手の要望に応じてタコ足的に増加したものですが、これを硬筆、毛筆、カルチャーの3部門とし、硬筆、毛筆は各1コースとします。カルチャー部門は細字連綿、百人一首など数コースを設けます。

書の学びの基本となる硬筆、毛筆学習が細分化されることで、生涯学習の大局を見つめることを欠く学習となることを避けたい、という声は教える側から強く出ていました。また、検定の累積点で節目をクリアしていく評価方法もゲーム的でふさわしくない、との指摘が出ています。また、検定が審査内容不明のブラックボックスになっている、との不満も寄せられていました。

こうした意見も踏まえ、書文協が目指している検定改革の柱は次のようです。

- ① レベルごとに求められる「評価の観点」をクリア（60～70%）しているかどうかで合否を決め、その内容を受験者に知らせる。
- ② 合否内容を知らせると同時に、受験作品をワンポイント添削し、受験生に戻す。
- ③ 全120課題を受験する内に、「評価の観点（計50項目）」がしっかり身につについて来れば“飛び級”を認める

## 見せる書写書道（作品化）に力

以上の改善点を踏まえて開設されたのが硬筆課題検定（新硬筆検定）です。現行の楷書と行書のコースを1本化し、これに草書を加え、硬筆の楷・行・草全てを見渡したコースとしました。また、本来の目的である「作品化」（見せる書写書道）を強く打ち出した内容となっています。

濃密な速習型となりますが、教室の指導者とタイアップした効果的な学習を工夫します。個人学習者には新硬筆検定添削指導コース（月刊書字文化9月号資料編参照）も用意しました。

新硬筆検定のテキストは「えんぴつ・ペン文字練習帳」（全15巻）（書文協製作）で7巻までが刊行されています。7～15巻サンプル版は、行書・草書が加わり“見せる作品”の工夫が強まる7巻以降のサンプル版です。希望者は本部まで。1冊400円（消費税、送料別）

## 現行検定受験団体はそのまま続行可能

現行の検定コースをしっかりと教えていただいている団体も多くあります。こうした既習団体でご希望の場合は、現行検定を続行することができます。新検定への移行には特別段級認定試験など工夫を凝らしていますが、現行の取得された段級が消滅するわけではありません。段級の記録は書文協のデータベースに記録保存されます。教材については硬筆・毛筆ともに現教材のコピー使用を許可していますのでご利用ください。

# 東・西・南・北

米国ミネソタ州在住 マーニー・ジョレンビー

## 不変でありたい「とめ・はね・はらい」

私はミネソタ大学で日本語一年生を担当しており、毎年40人ぐらいの学生に平仮名と片仮名と漢字を教えている。色々な国籍と様々な目的を持つ学生がいて、すでに日本語と日本文化に詳しい学生もいれば、「着物」という言葉の意味さえ分からない学生もいる。三年生まで続くのはわずか三分の一ぐらいである。多くの学生は日本語とは一年間、長くても二年間の付き合いでやめてしまう。新聞や小説を読んだり、漢字を使ってエッセイや論文を書いたりするようになる学生は一握りしかない。

最近では日本でも「とめ・はね・はらい」をしっかりと教える必要はないという意見もあるようだが、私は違うと思う。

恥ずかしながら、十年ぐらい前まで「川」という字の最後の画に「はね」を付けて書いていたのだが、ある日間違っていることに気づいた。正しく書いてみた時、頭の中でずっと堰止めていた「川」の水が、初めて流れ出したのをはっきりと実感し、この字が、流れていくべき字だとつくづく思った。「川」の三画目がはらいという知識は、本当になくなって大丈夫なのだろうか。

今学期も漢字を力の限り正しく、細かく教えることに決めた。筆ペンも、今年も学生に握らせることにした。そして、北京で入手した、コンクリートの上に水で漢字を書くためのスポンジ・ブラシも。ミネソタの秋の清々しい空気の中で漢字を書くのはいい体験になるはずだ。

最近、大学のミーティングで「学生が『持つ』という字を書く時、部首の『はね』が『はね』ではなくて、手偏のもう一画のように見えてしまう。醜く書かれてはたまらない」という声が出た。伝統は水面のように目まぐるしく変わっていき、模様が見えたと思えばもう消えてしまっている。一方、人間は流れゆく水ではない。「持」の2画目が、一度手に「持」ったのに指の筋肉を緩めて落としてしまう形になってもよいのだろうか。

**編集後記** ジョレンビーさんは日本文学博士で米国ミネソタ州立大の日本語専任講師。学生の頃、日本語を学んで以来「日本」を考え続けてこられました。言霊の国の日本人が失いかけた感性が光る原稿です。目下、作家のための著作権エージェント会社「ボイルドエッグズ」(村上達朗代表)と契約し創作活動中で先日、書文協の教室を視察しました(写真)。神戸女学院の「KCC 日米教育交流会理事会」(<https://www.kccjee.org>)の理事を務め若者の日米交流にも取り組んでいます。



(書文協の視察で見事な書を披露した Dr. ジョレンビー)



# 書法・書道の交流促進を 日中友好文化交流の柱

「日本の書道と中国の書法は、どこが違うのでしょうか?」。展示交流会場から出たこんな質問に中国の高名な書家、尉天池先生はこう答えました。「呼び方が違うだけですよ」。「少年易老学難成…」。書法作品が所せましと飾られている会場に「ナットク!」の空気が流れました。

銀座で開かれた「書法芸術展」の最終日、9月9日に開かれた交流会に、書文協から大平恵理会長。渡邊啓子副会長らが参加しました。同展は「チャイナフェスティバル2018」の一環で、NPO法人日中文化交流促進会(劉洪友リュウ・コウユウ理事長)、中国文化人物雑誌社などが主催、日本外務省、在日中国大使館などが後援し、9月4日から開かれたもので、これにあわせ中国から尉さんら高名な書家3人が来日。主宰者の劉洪友さんと併せ4人書法芸術展を開いたのでした。

劉さんはこのほど全日本華人華僑連合会長に就任したばかりで、在日30年の書家として、文字通りの文化交流を展開していく、としています。

書文協は劉さんの書の文化交流にこれまでも協力してきました。6年前、日中国交正常化40周年を記念した日中学生国際書道展には、書文協から会場の南京市に約30人の訪中団を派遣。この夏、中国が開いた第1回米芾杯国際青少年書道大会(中国国際書画芸術研究会 中国文字博物館、江蘇省教育書道協会など共催)に書文協から84点を応募。8月末には同大会で優秀な成績を収めた中国の児童・生徒9人が日本を訪れた際、書文協は交流席書大会を開いたことは、月刊書字文化9月号でお知らせしました。

交流会で参加者約200人の前に立った大平・書文協会長は「1980年代の初めに中国を訪れた時、尉先生が学校で熱心に教えられる姿を拝見しました。書文協は、書を通じての日中の文化交流をこれからも続けていきます」とスピーチ(写真)。一方、書文協が作成したばかりの「新・硬筆テキスト エンピツ・ペン文字練習帳7~15巻サンプル版」を会場で配りました。漢字仮名交じりの日本文の習得にも力をいれていることを知ってもらうため、書き文字文化に関心のある中国の人達に喜ばれました。



左から大平会長、蘇士澍、尉天池、劉洪友先生

## 米・ボストンでも席書大会

～どこでも誰でも気軽に参加を～

第7回総合大会で、学生書写書道展の席書の部が増えました。席書は書を学ぶ上でとても効果的なので、書文協として参加費を安くするなど、多くの人に参加しやすくする工夫をしてきました。事前に書文協本部から席書開催認定を受け、書文協席書ルールを守っていただければ、どの団体でも、誰でも参加できます。当機関紙9月号の東・西・南・北を書いていたいただいた米国・ボストン在住の西片由貴先生も、小規模ながら学生展(毛筆)の公募だけでなく席書の部も実施し、出品してきました。ボストンは米国東海岸にある文教都市として名高い街。発展を期待したいと思います。

# 第4回臨書展

平成31年3月15日（金）締切

## 主催

日本書字文化協会

## 後援（予定）

（日本側）

青梅市日中友好協会

中国書法学院

国際芸術家連盟

日中文化交流促進会

（中国側）

蘇州・寒山寺

中国国立南京芸術学院日本校

蘇州呉昌碩研究会



## 募集部門

◇臨書の部（1）高校教科書掲載の臨書教材から4文字以上

◇臨書の部（2）常設課題 漢詩「楓橋夜泊」の1句以上

◇楷書書写の部（漢詩「楓橋夜泊」に出てくる10文字中1-3文字。参考手本あり

## 賞

大賞（臨書の部1・2から）

日本書字文化協会会長賞

青梅市日中友好協会会長賞

日中文化交流促進会理事長賞

優秀賞

## 出品料（単位：円）

	年少～中学生	高校生以上	個人出品
臨書の部	756円	1080円	1620円
楷書書写の部	540円	756円	1620円

## 優秀作品展示会

5月中旬、東京都青梅市沢井、澤乃井ガーデンギャラリー

第4回臨書展はこれまで同様に青梅市沢井の鶴の瀬溪谷に立つ日本寒山寺を舞台に展開します。今回、大きく変わったのは臨書の部（1）が、4文字以上と書かなくてはいけない字数がぐっと少なくなり、多くの人が参加しやすくなったことです。

詳細な実施要項は月刊書字文化12月号に掲載